九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

医学図書館の貴重書庫にある変な本について : その2

古賀, 京子
九州大学医学図書館

https://doi.org/10.15017/1956598

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2017/2018, pp.43-47, 2018-07. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution 4.0 International

報告

医学図書館の貴重書庫にある変な本について
－その 2－

古賀　京子 †

<抄録>
医学図書館にある和漢古医書の中で興味をひかれた資料について報告する．
<キーワード>　吐方考，永富独嘯庵，原芸庵，荻野元凱，吐法編，加古公山，吐方撮要，漫游雑記，山脇東洋，吉益東洞，亀井南冥，僊桃記，加藤善菴，祝由科，怪病神医録，忍公

Rare Books at Medical Library
－2－

KOGA Kyoko

1. はじめに

医学図書館貴重書庫内の和漢古医書について，その全体像を把握するためにリスト作成を行っている．NACSIS-CAT に未登録の資料も多く，日本古典籍総合目録データベースにも収録されていない資料もあることから，リストが完成すれば何かと役に立つのではないかと考えている．作業の中で興味を持った資料をここに数点紹介する．

2. 吐方考と永富独嘯庵

2.1. 吐方考

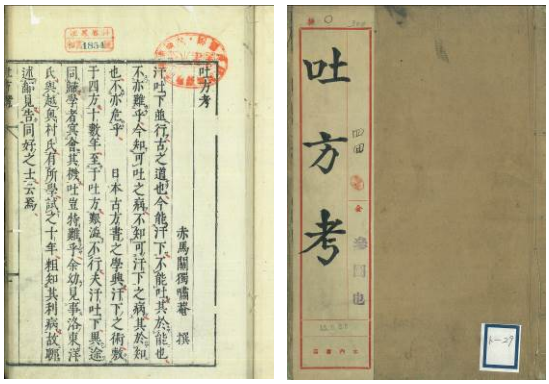

写真 1　吐方考一巻　永富独嘯庵撰　宝暦十三年
圓屋清兵衛刊本の後印　（ト-29 泌尿器科 1854）

「原芸庵薬室記」，「原氏之図書記」の印記あり．

日本の医療は，古来より中国医学に大きく影響を受け，江戸時代中期になると独特の発達を遂げていた．古くから行われていた治療法として汗・吐・下の三方があるが，これも中国医学より取り入れたものである．汗方は発汗，吐方は嘔吐，下方は排泄によって病気を治療する方法である．

『吐方考』巻頭には下記のようにある．

「汗吐下並べ行ふは古の道なり．今，汗下を能くして吐を能くせず．其の能におけるやまた難からずや．今，吐すべきの病を知りて，汗下すべきの病を知らざれば，その知におけるやまた危ふからずや．」（原文は漢文）

日本では汗方と下方はよく行われていたが，吐方はあまり行われていなかったようだ．吐方を用いるときは，白湯を飲んでから指を喉に入れてつきあげるように吐くことや，瓜蔕（かてい，瓜のヘタ）等嘔吐を促す薬剤を用いる時の注意点などが書かれている．反胃，小児癲癇，黄疸，煩喘などの症状がある者には吐方が有効であること，また吐方を用いるべきではない病状や体調などについても詳細に書かれている．

本文の最後は次の一文で締めくくられている．

「始めて信ず古人の技，既病に在らずして未病に在ることを．」

著者は中医書の『傷寒論』や『金匱要略』，『儒門事親』等を参考に，様々な吐方を臨床で試しているが，すべての患者に良い結果が出たわけではなく，未病（病気を防ぐこと）がいかに重要であるかを述べている．また，医者のあるべき姿についても確固とした考えを持っており，臨床試験や自己研鑽を怠ったり，名利を欲して医者になったりする者を諫めている．

† こが きょうこ　九州大学医学図書館　（〒812-8582 福岡市東区馬出 3 丁目 1-1）　E-mail: koga.kyoko.676@m.kyushu-u.ac.jp

吐方に関する本は他に荻野元凱（1737-1806）の『吐法編』，加古公山の『吐方撮要』がある．

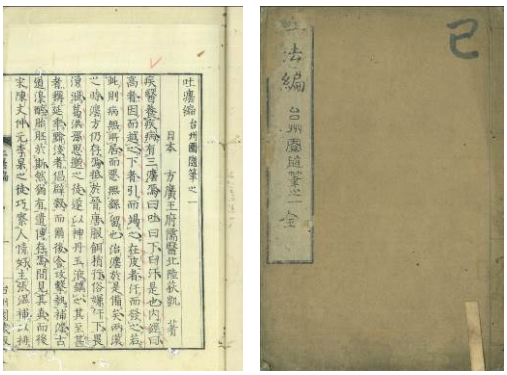

写真 2　吐法編一巻 荻野元凱撰 宝暦十四年林伊兵衛刊本の後印（ト-148 解剖学教室 6671 杏仁医館文庫）

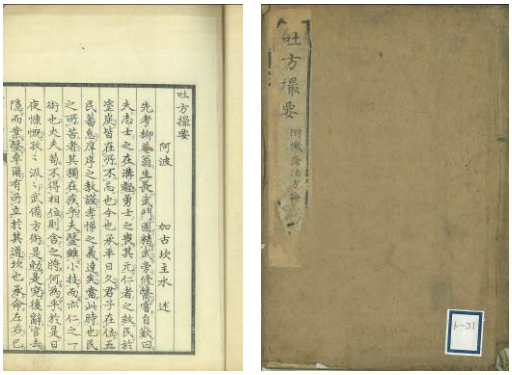

写真 3　吐方撮要一巻附録一巻 加古公山撰 東壁堂刊本（ト-31　泌尿器科 1710）

2.2. 永富独嘯庵

『吐方考』著者の永富独嘯庵（1732-1766）は，江戸中期の医師である．長門国豊浦（山口県下関市）の勝原家に生まれ，赤間関の医家永富友庵の養子となった．名は鳳，のち鳳介，字は朝陽．初め義父に医学を学び，萩，さらに江戸で医学を修め，その後，京都の山脇東洋（1705-1762）に師事して古医方（漢方医学の一派．『傷寒論』や『金匱要略』などを重視した後漢時代の処方を行った）を学んだ．東洋より越前国の奥村良竹（1686-1760）のもとに派遣され，吐方を学びその成果を『吐方考』に著した．宝暦 13 年（1763）に発行されたときには東洋はすでに世を去っており，嫡子の東門が序文を書いている．

諸国を数年間漫遊し，そのときの経験をまとめた医学随筆集が『漫游雑記』である．この書の中で，越前で学んで帰った後に実際に患者に吐方を施した治験が数例書かれている．成功例のみでなく失敗例も書かれているところに独嘯庵の医師としての真摯な態度が表れている．二仙散（吐方に用いる薬剤の一つ）を白湯に溶かしてある患者に飲ませたが，夕方に至るまで少しも嘔吐せず，日暮れに粥を三椀食べて元気になってしまったときは，独嘯庵は恥ずかしくて顔を赤くして帰った，という話もある．

独嘯庵は古医方を中心にしていたが，諸流派の優れた点は取り入れており，宝暦 12 年（1762）には，長崎の吉雄耕牛（1724-1800）に蘭学を学んだ．『漫游雑記』の中でも和蘭医書で目にした乳癌の外科手術の可能性について触れており，後に華岡青洲（1760-1835）が日本で初の乳房離断術を成功させた際にはこれを参考にしたとされている．

『皇国名医伝』によると，独嘯庵は酒に酔うと「口論辯難窮詰，従うに慢罵を以てす」とあるように毒舌家だったようで，京都の方言で蕩汰放縦の者を毒性（どくしょう）と呼ぶことから自分を同じ音の独嘯庵（どくしょうあん）と名乗るようになったという．

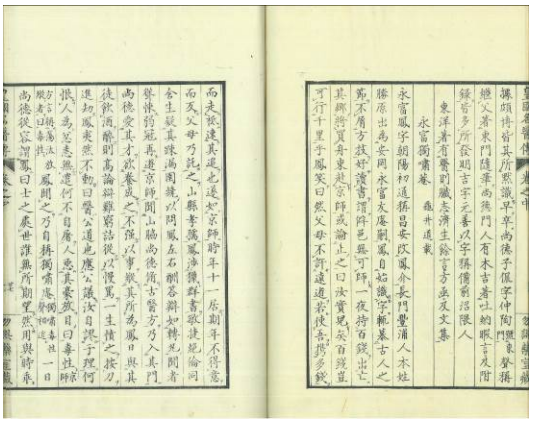

写真 4　皇国名医伝三巻 浅田惟常撰 出雲寺文次郎刊本（コ-93　衛生学教室 2158）

また，白砂糖の製造技術を学び，山口で兄と製糖事業を興したが，あまりのできのよさに砂糖の密輸を藩に疑われ投獄されたという逸話がある．投獄中には『嚢語』五篇を著した．35 年という短い生涯であったが，名医として名を轟かせただけではなく，多才な人であったことがうかがえる．

写真 5　永富独嘯庵先生顕彰碑　山口県下関市王司（2018 年 6 月 24 日筆者撮影）

2.3. 亀井南冥

独嘯庵の代表的な門人に亀井南冥（1743-1814）がいる．筑前国姪浜（福岡県福岡市）に生まれた．名は魯，字は道載．少年期より徂徠学派の僧大潮に学び，上坂して独嘯庵に師事．帰国後，父に従い医院・塾を経営，朝鮮通信使との詩文対応でその才を認められ，藩の儒医に抜擢された．天明 4 年（1784）に福岡志賀島で発見された金印について，いち早く『後漢書』東夷伝を引用し考証を行ったことで有名である．宝暦 13 年（1763）に出版された独嘯庵の著書『漫游雑記』には序文を書いているが，この時わずかに 20 歳であった．

医学図書館では南冥の著書として『病因備考』，『病因考備考』の写本を所蔵している．中風傷寒など約五十項目の疾病についての病因治療法であり，独嘯庵の説を多く引用している．

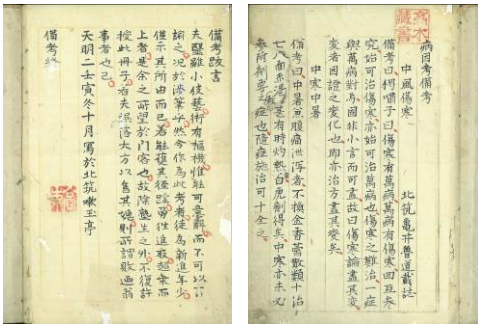

写真 6　病因考備考一巻 亀井南冥撰 鈔本
（ヒ-15 泌尿器科 3585）

3. 僊桃記

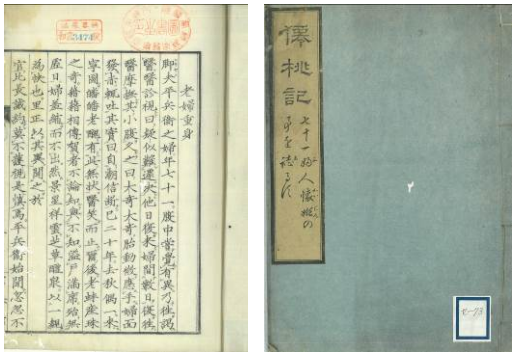

写真 7　僊桃記一巻 加藤善菴撰 刊本
（セ-73　泌尿器科 3474）

題簽に「七十一婦人懐妊のきを誌るす」とあり．題跋にある書名は『僊桃録』．内容は天保 4 年（1833）の記録である．

「老婦重身」という内題があり，本文が始まる．

「脚夫平兵衛之婦．年七十一．腹中嘗覚有異．乃往謁医．医診視曰疑似難遽決他日復来．婦間数日復往．医摩撫其小腹久之曰．大奇大奇．胎動微応手．・・・・・・老蚌産珠之奇．籍籍相傳．賀者不論知與不知溢戸満席．殆無虚日．婦羞縮而不出．然景星祥雲．芝草醴泉．以一覩為快也．里正以其異．聞之於官．比長誡約．莫不護視是慎焉．」

ある日，岡永友啓という医師のもとに 71 歳の婦人が腹の違和感を訴えてやって来る．友啓の診断では，その老婦は妊娠しているという．続いて福にあやかろうとしてか人々が家に押し寄せる様子や，里正（里の長）が官（役人）に報告する様子などが書かれている．いつの時代においても懐妊はめでたいことであるが，福徳思想が人々の生活に深く根付いていた江戸時代において，世上に見慣れぬ珍奇な事物は瑞祥の兆しとされていた．分娩は夏だと友啓が言ったとあるが，その後赤ん坊が無事に生まれてきたかどうかまでは書かれていない．

著者の加藤善菴（?-1862）は，江戸時代後期の儒者，医師．播磨姫路藩士．大田錦城に学んだ．名は良由．字は良白．著作に『六国史論』『柳橋詩話』などがある．

『僊桃記』は善菴が老婦妊娠の事象を紹介し，丹波元堅，高橋恕菴，角南董菴ら複数の医師が所見を書き寄せた構成になっている．

4. 祝由科

4.1 軒轅黄帝祝由科

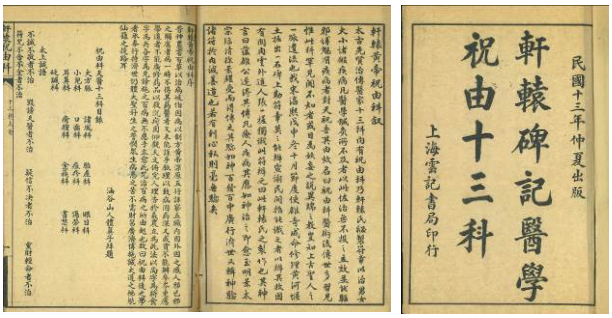

写真 8　軒轅黄帝祝由科一巻 □闕名撰 民国十三年
上海雲記書局石印本（シ-400　衛生学教室 2914-34）

太古の中国では，疾病は鬼神の祟りまたは祖先が子孫に与えた罰の結果と見なされていた．祝由（しゅくゆう）とは，祈祷，祭祀，呪詛などにより病気を治療する方法である．中国古代の医書である『黄帝内経素問』「移精変気論」の項にも以下のような記述があり「祝由」という言葉が見える．

「黄帝問曰．余聞古之治病惟其移精変気可祝由而已．今世治病．毒薬治其内．鍼石治其外．或愈或不愈何也．岐伯対曰．往古人居禽獣之間．動作以避寒．陰居以避

暑．内無眷慕之累．外無伸宦之形此恬憺之世．邪不能深入也．故毒薬不能治其内．鍼石不能治其外．故可移精祝由而已．」

秦漢から唐，元に至るまで，歴代の宮廷には祝由科が設けられていた．1571 年明の時代に廃止されるまで，長きに渡って祝由科は中国医学において重要な位置を占めていた．

『軒轅黄帝祝由科』は，表紙の書名は『軒轅十三道碑記辰州霊符祝由科』，封面の書名は『軒轅碑記医学祝由十三科』である．序文には軒轅（黄帝．伝説上の帝王，中国医学の始祖とされている）が作ったとする石碑についての伝承が書かれている．宋の時代淳熙 15 年（1188）に節度使の雒奇が黄河堰の修理を行っていたところ，一つの石碑を掘り出した．石碑には符章（呪符に用いる文字）が彫られていたが，何が書かれているのかを理解できる者がいなかった．しかしただ一人，道人張一槎という人物がこの内容がわかると言った．太古の時代，軒轅は符章を以てあらゆる病気を治療していたという伝説があるが，この石碑はその軒轅が作ったものであるという．雒奇がその碑文にある符章を用いて治療を行うと病人を治すことができた．

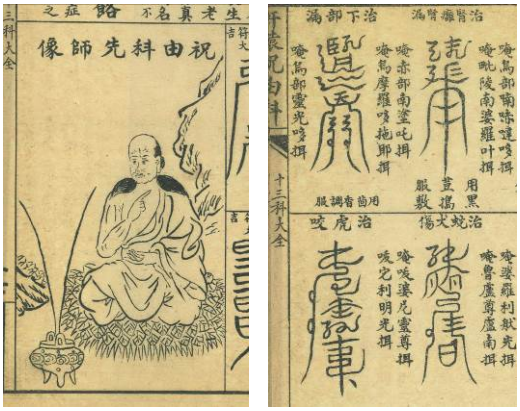

写真 9　本文と挿図

本文の内容は，呪符に使う文字の一覧であり，病名ごとに対応した呪文のようなもの，複雑な漢字や特異な文字が書かれている．巻末には祝由科先師像の挿図があり，独特な雰囲気を醸し出している．着衣ははだけており，両肩には黒い毛皮のようなものがかかり，額には模様のようなものがある．敷き詰めた木の葉の上に座していて，そばには鼎が置かれ香を焚いているのか煙を漂わせているような描写がある．

過去に衛生学教室では唐本を多く購入している．図書原簿によると，昭和 4 年 2 月 16 日には一度に 293 部の唐本を購入しており，すべてに 2914 という備品番号と 1 から 293 までの枝番号が付与されている．このうち現物を確認できたものは 277 部 1615 冊である．木版本もあるが，19-20 世紀初の石印本が多く，この本もその一つである．

4.2 怪病神医録

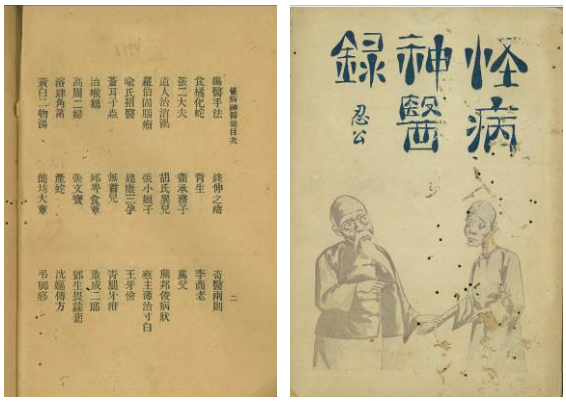

写真 10　怪病神医録一巻　忍公撰　民国十年
上海進化書局排印本（眼科 4991）

おそらく数十年前から貴重書庫の未整理棚に置かれていた本であり，古い本ではないが，CiNii Books，WorldCat，中国国家図書館の蔵書検索でもヒットしないことから，稀少であることは間違いない．これを機に受入目録係の目に止まって登録してもらえるといいと思う．

表紙には薄墨で描いたようなイラストがある．眼鏡をかけ長い髭をたくわえた恰幅の良い老人が，顔色が悪くやせ細った男の手首に手を当てている．脈を取っているところだろうか．目次には病名とも何ともつかぬ項目が 129 個並んでいる．

「腹中鶏鳴」という話の中に祝由科の医師が登場する．「腹中鶏鳴」は腹の中で鶏が鳴く，ということだろう．一体これは病気なのか，まず疑念が生じる．短い話なので以下，全文を転記する．

「黔南山嶺崎嶇．苗民與漢族雑處．所食喜生腥．蝦蟆毒蛇．彼輩皆視爲珍品．有漢民農婦某氏．與苗族雑居久．亦習其俗好食山禽．年四十後．忽得奇疾．有聲來自腹中．若雛鶏聲一二月後．鳴聲漸巨．毎至五更．隣鶏鳴而腹中鶏聲亦和之．毎値腹中鶏鳴．則農婦頭痛不可忍．如是半年．無薬可治．後有湖南祝由科王某遊黔中．過其地．衆以農婦病告．王某曰．此可治也．苟聞腹中鶏鳴時．取白雄鶏一．殺取其血．乗熱飲之．五次而愈．衆問其故．王某曰此嗜食生禽所致也．惟雄鶏血可以解其毒云．」

これを要約してみると以下のような話だと思われる．
苗族と漢族が一緒に暮らしている地域があった．漢

族のある農婦が苗族の習慣をならって山鳥を食べた．すると自分の腹から鶏の声がするという奇妙な病気になった．鳴き声はだんだんと大きくなってくるようだ．毎日夜明け頃に隣家の鶏が鳴くと，これに合わせて自分の腹でも鶏が鳴く．やがて農婦は頭痛に耐えられなくなった．そこに祝由科医師の王某が通りすがった．人々が農婦の病気を相談すると，王某は雄鶏の血を飲ませることによりこの病気を治した．王某いわく，生の鳥を食べるとこういうことが起こるが，雄鶏の血で解毒できるのだ，と．

祝由科がどのような治療法をとっていたかその一端がうかがえる．ただし，古代医学とシャーマニズムが密接に関係した一つの学問体系としての祝由と，民を惑わす迷信として描かれる近代の祝由は同日に語ることはできず，内容の判断には注意を要する．

参考文献

[1] 山田照胤．吐方の文献的研究 第一編 吐方と吐方家に関する歴史的考察．日本東洋医学会誌．1958，9 巻，1 号，p.15－19.

[2] 木山芳朋．独嘯庵．永富独嘯庵顕彰会，1957，284p.

[3] 永富独嘯庵原著；粟島幸春譯註．医聖永富独嘯菴．東洋医学薬学古典研究会，1997，559p.

[4] 富士川游．漫游雑記．中山文化研究所，1940，202p.

[5] 小曽戸洋．日本漢方典籍辞典．大修館書店，1999，469p.

[6] 漆浩著；池上正治訳．中国養生術の神秘：医術・巫術・気功．出帆新社，1999，401p.

本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて、本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 4.0 国際（CC BY-NC-ND 4.0）ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja